

2019-11-03

水龍敬ランドにおける 特別催眠処置報告書

File.0001

執筆者:病み時計

執筆者所属:時計工房

概要

水龍敬ランドはセックスの自由と解放をうたう世界最大規模のテーマパークである。かつて偉大な漫画家によって実現されたこのランドでは、現実のしがらみから離れ人種・性別・年齢を問わず誰でもセックスを楽しむことができる。

しかし、ただ自由を謳うだけでは現実的な組織運営など絵空事にすぎない。崇高なる自由性愛の理念を危険に晒すやからはいつの時代も存在するものだ。

当機関はそんなお方々にもランドを楽しんでいただけるように開設された独自組織であり、我々は高度な催眠技術を用いて彼らへの対処を試みる。

この報告書は対象となったゲストのデータや、取り組みの経緯をまとめた極秘資料だ。中にはランドの規則や社会理念に違反しかねない行為まで記載されているため流出は絶対に阻止されなければならない。

もっとも、この文章を読んだあなたが日常に戻れる保証などありはしないのだが。

目次

p. 4 水島あやか

タグ:催眠(軽度)、性欲強化、純愛？

p.16 水島智香(みずしま ともか)

タグ:常識改変、認識操作、性欲超増大、人生改造

水島あやか

身体情報

身長：165.2cm

体重：56.0kg

18歳

ステータス：高校二年生

スリーサイズ：76/70/86

職務経験

都内のカトリック系女学高に通う少女。性に厳格な家庭に生まれ、規律の厳しい環境で育ったため性的なことに対する拒否感が非常に強い。

男根及び男性そのものを著しく嫌う傾向が強く見られ、異性愛に熱心な女性にも同様の嫌悪感を示している。

非常に勝ち気で自分が正しいと思うことは曲げない性格。

彼女の姉も同様に性的なことを苦手に思っていたが、先日当ランドに就職して以来熱心に勤務している。仲が良かった姉の突然の変化に強い不信感を持ち、説明を求めて受付で暴れていたため機関へまわってきた。

容姿

容姿：焦げ茶色のポニーテールにキツイツリ目が特徴的。来場時は紺色のシックな制服を着ていた。

催眠内容

催眠強度：弱

催眠内容：性欲微強化、苦痛快感変換、感度上昇

Story

「だから！ お姉ちゃんに会わせてって言うてるでしょ!!」

声を荒げながら受付の机を両手で叩く。周囲のカップルや親子がこっちを見た気がするけど、今はそんなことを気にしている余裕はない。

テーブルの向こうでは悪魔風カチューシャをかぶり、上半身裸で下はタイツのみという恰好の女性スタッフが苦笑いを浮かべていた。

「そう言われましても……お会いさせることはできないというのが彼女と上層部の判断でして」

らちが明かない返答に思わず舌打ちが出る。こんなバカみたいな恰好をした女にクレマー扱いされるなんて屈辱もいいところだ。

こいつだけじゃない。いい歳して派手な服着てるおばさんも、乳首をハートのシールで隠してる大学生も、下品な服装で自撮りしてる集団もみんなばっかみたい！！

本当ならこんなところ死んでも来たくなかったし、今すぐ出て行きたいって思ってる。でも私はお姉ちゃんについて教えてもらうまで帰るわけにはいかない。

「お姉ちゃん……」

私のお姉ちゃんは優しく、かっこよくて、ずっと理想の姉だった。頭がよくて勉強もできたし、私もお姉ちゃんみたいになりたいと思っていた。近所でも評判の仲良し姉妹でこれからずっと一緒だと思っていたのに……。なのに先日仕事の一環とかでこの水龍敬ランドに行ってから、すっかり変わってしまった。

ずっとえっちなことは嫌いだったのにいきなり **AV** や卑猥な道具をたくさん買って帰ってきたり、見たこともない派手で露出の多い服を着るようになった。暇があればお、オナニーして、嫌な臭いをつけながら帰ってきたり。挙句の果てには『水龍敬ランドで働く』とだけ書き残して家を出て行ってしまった。

お姉ちゃんがおかしくなったのは絶対にここに来たからだし、私はなんとしても真相を知りたい。その為にわざわざこんな性欲猿の巣窟に来たんだから……！

そう決意を新たにした時、後ろから誰かが声をかけてきた。

「お待ちしましたお客様。たった今説明の準備が整いましたのでお迎えにあがりました」
振り返ると、そこには胸と股間を切り取ったラバースーツを着た若い女性が立っていた。歳は私とそう大差ないように見えるけど、落ち着き払った雰囲気は大人びた印象を与える。

彼女は恭しくお辞儀をすると、自分の背後にあるスタッフ用ドアを指差した。

「こちらのお客様は私が対応いたします。よろしいですね？」

「えっ、あ、はい！」

さっきまで話していた女性スタッフは慌てたようにお辞儀をする。どうやらこの人についていく以外選択肢はないらしい。ここにいてもしょうがないと思った私は、少し怪しさを感じながらもラバースーツの女性に従うことにした。

ドアの中はさっきまでの明るく騒々しい雰囲気とは打って変わり、薄暗い廊下が続いていた。私たち二人の靴の音だけが周囲に響く。

「ねえ。本当にお姉ちゃんが急に変わった理由を教えてくださいよね？」

「ええ、もちろん。とはいえ特にお伝えすることはありませんが」

「はあ!! 話が違うじゃん！」

不満を隠さず大声で叫ぶと、前の女性は立ち止まり、ゆっくりと振り返った。

その表情を見て思わず冷たいものが走る。とってつけたような嘘くさい笑みに加え、氷のように冷たい目が私を見ていた。

「私が教えて差し上げると言ったのは、貴女の親友を変えた価値観についてですよ」

「かち、かん？」

笑みを浮かべたまま近づいてくる彼女が怖くて、思わず後ずさる。シンと静まりかえっているせいで心臓の音がやけに大きく聞こえた。

私は少しずつ通路の壁へと追い込まれていく。彼女に背を向けてはいけないと本能が訴えていた。

「貴女のように頭が悪くて若いメスに必要なのは、学校の勉強なんかじゃなくおちんぽに媚びてセックスすることってわけです」

「え……あ……………」

突然首筋にチクッと軽い痛みが走り、意識が薄れていく。身体から力が抜けていくなかで最後に見えたのは、ラバースーツ女のいやらしい笑みだけだった。

「さあ～ まもなくパレードが始まりまあ～す♡」

「ねえ、今度はあっちのアトラクションでハメよう！」

「よかったら僕とやりませんか？」

周囲の騒がしさに不快感を感じながら、やけに重く感じる目を擦る。どうやら少し気を失っていたようだ。こうしちゃいられない、早くお姉ちゃんのこと……を…………

「え……？　なんで、私園内にいるの？」

思わず自分の目を疑った。辺りではみんなほとんど裸のような格好で、人目も気にせず交じり合っている。そこは **CM** に映るたびに憎々しい視線を送っていた水龍敬ランドそのものだった。

半ば呆然としながら後ずさる。誰かにぶつかってしまったようで、背中に生暖かい感触が伝わってきた。

「あ、すいませ……」

「いいよ～ お、貴女かわいいね。私たちと一緒に **3P** しない？」

後ろを振り向くと、そこには水玉模様みたいにあちこち大きな穴の開いた網スーツを着た女性と下半身を露出させた青年がいた。二人とも互いの股間に手を伸ばしてそれぞれの性器を弄んでいる。ぐちゅぐちゅ、という水音が耳に飛び込んでくる。

「ひ、ひいつ」

私は慌てて背を向けて、一心不乱にその場から逃げた。さんぴーというのが何なのかはわからないけどえっちなことなのは間違いない。

出口を探してあちこち見渡すけど、目に入ってくるのは盛りまくってる男女だけだった。気持ちよさそうな顔で交わる彼らを見てると自分が間違ってるような気さえしてくる。

「あっ！　あの、すいません！　聞きたいことがあるんですけど」

周囲の痴女の中から【CAST】のラベルを巻いた人を見つけて駆け寄る。ほとんど他の女性と変わらないような格好だけど、あのベレー帽と上に羽織っているジャケットはスタッフ用だったはず。

「はい、何か御用ですか？」

「はあっ……早く帰りたくて……はあ……出口ってどこですか？」

いきなり走ったせいで息も絶え絶えだったけど、キャストさんは優しく笑いながら言い終わるのを待ってくれた。でもまだ園内を出るまでは安心できない。

話を聞いたキャストさんは、両手を合わせながら残念そうに眉を下げた。

「ええ～ もう帰られてしまうんですかあ～？ せっかくそんなに素敵な格好をしてらっしゃるのに！」

「え、すてき……？ きやあああああああつつつ！！」

私がランドに来る時に着てきたのは学校の制服のロングスカートとブレザーだった。暗めの紺色に統一され、露出も少ないのでここに合っているとはお世辞にも言えないはずだ。

彼女の言葉に違和感を感じて身体を見下ろすと、ほとんど肌を隠せていない裸同然の自分が目に入った。

大きすぎる悲鳴が口をつき、急いで胸と股間を両手で隠す。

唐突な悲鳴にキャストさんが心配そうに声をかけてくれるけど、とても顔を上げられそうにない。こんな格好で外を歩いていたなんて……！

恥ずかしさで顔から火が出そうだった。

「その……ごめんなさい！」

「お客様!!」

少しでも人が少ないところへと、逃げるように駆け出す。まともに人の顔も見られないけど視線を下げると裸が見えてしまう。

必死で走るうちに隠れられそうな草むらを見つけ、急いで飛び込んだ。

そこの地面は柔らかい芝生に覆われていて、所々今身を隠しているような茂みがある。どういう目的で作られたアトラクションかはわからないけどやっと一息つける。

「けど、何この格好！」

改めて自分の姿を確認すると、眩暈がしそうなほど知性を感じない状態だった。

乳頭と股間にはハート型のシールが貼られているものの、逆にそれくらいしか秘部を隠すものがない。むしろ隠すどころか卑猥さを強調しているように思えてくる。

手足には明るいピンク色のゴム製ストッキングと手袋がつけられていて、パツパツなせいで上手く脱げない。靴は学校指定のローファーのままなのがかえってアンバランスさを際立たせていた。

おへその辺りにはこれまたハートマークを淫靡に魔改造したタトゥーシールのようなものが貼られている。

極めつけに外し方の分からない首輪までつけられていた。細かい造りはよく見えないけど、確か電子リーダーとしてみんなが手や首に着けていたものな気がする。

「なんかこれべたついて……うわぁ」

さっきから後頭部に感じる違和感の正体を確認するため手を伸ばすと、べちゃ、という不快な感触が手のひらに伝わる。いやいや掴んで見えるよう引っ張ると、それが使用済みのコンドームだと分かった。

初めて間近で見る精液は白く濁っていて嗅いだことのない香りが鼻を刺す。

まさか自分が精液の溜まったゴムで髪を留めているなんて……

「くっ……きやぁ！ 最悪……」

力任せにゴムを引きちぎろうとすると、強度に耐えきれなかったコンドームがちぎれ、中の精液が飛び散った。白濁液はほどけて伸びた髪やむき出しの肌を濡らしていく。

拭くものもないので仕方なく芝生にこすり付ける。

「まったく……こんな……きたないなあ」

汚らしいとはわかっているものの、興味本位で手の甲を顔に近づける。

今までの生活では全く知らなかったオスの臭い……嗅いでいるとなんだか頭が熱っぽくなってきた。

もし、もしこんなものを身体の中に出されたらどうなっちゃうんだろう。

「いやいや！ そんなのあり得ないし！」

ふと浮かんだ考えを払おうと頭を振る。どうやら私も知らないうちに水龍敬ランドの雰囲気染まってしまうらしい。一刻も早く外に出ないとおかしくなりそうだ。

「お嬢ちゃん、空いてるなら俺らとやらない？」

「え？ きやつ」

背後からかけられた声に振り返ると、目と鼻の先に焦げ茶色の何かが突き付けられた。一拍置いてそれが男性器だとわかり、座ったまま後ずさる。

声をかけてきたのは二人組の男性で、明るい髪色と声の調子からチャライ雰囲気を感じてしまう。二人とも上半身裸で股間部分を晒した半ズボンを履いていた。

勃起した男性器を見せつけてくる二人に恐怖より先に困惑してしまう。

「そ、そんなことできるわけじゃないですか！ こんなところで、名前も知らないのに……」
私が戸惑いつつも拒否すると、彼らは驚いたように目を丸くした。

「でもここ大草原青姦エリアだし。それにフリーセックスシールつけてるよね？」

彼の指差す先を見ると、私の右わき腹には男性マークと女性マークを交わらせたようなシールがついていた。確かにそこには英語で『FREE SEX』と書かれている。

それじゃ私は『セックス自由！』ってシールを付けて、野外セックス用の場所に隠れていたってこと……？ 裸みたいな恰好で外を歩いていたところの話じゃない、完全に他の痴女と同類じゃないか。

気づけば私は急いでその場から逃げていた。走るのにも疲れて、背中を丸めてとぼとぼと歩く。右手で胸を抱えて左手で股間を押さえ……それでもずっと誰かに見られているようで落ち着かない。

「あ、観覧車……」

ふと顔を上げると、普通の遊園地でも見かける定番のアトラクションに安心感を感じる。気づけば私は吸い寄せられるように女性たちの列に並んでいた。

みんなが楽しそうにおしゃべりしながら順番を待つ様子を見てみると、一人だけ身を隠しながらこそこそとしている自分が惨めに思えてくる。

早く帰りたいなあ……

近くで見ると、どのゴンドラもやけに揺れているような気がする。少し引き返したくなったところでうさ耳をつけたキャストさんが正面に現れた。いつの間にか自分の番が来ていたらしい。

「姦乱車へようこそ！ 素敵な空の旅をお楽しみください♡」

彼女に促されるままにゴンドラの中へと足を踏み入れる。やっと座れる……と思ったのもつかの間、私だけと思った室内に反対側のドアから筋肉ムキムキの男性が入ってきていた。

「あ……え……………？　なんで？」

「おお、こんにちは。こりやまた奇麗なお嬢さんだ！」

『姦乱車』

それがこのアトラクションの正式な名前らしい。ランダムで男女のペアを組んで乗り込み、ゴンドラが一周するまでの間を二人きりで過ごす。中にはふかふかのカーペットと椅子が用意されていて、安全も保障されているので快適に性行為だってできる。

……というのが目の前の男性が教えてくれた概要だった。

私は乗り込んですぐに自分でも中に入った覚えがないこと、えっちなことは苦手でも今にも帰りたいと思っていることを泣きそうになりながらもなんとか伝えた。

股間だけきれいに切り抜かれたボクサーパンツのみを履いた男性は、真剣な顔で私の話を聞くと、優しい笑みを浮かべた。

「それは災難だったね……。わかった、君に手を出さないと約束しよう」

「し、信じてくれるんですか？」

「もちろん！　レディの言うことを疑うわけないよ」

彼は親指を立てながら白く光る歯を覗かせた。

知らずに乗り込んだ時はどうなることかと思ったけど優しい人で良かった。とはいえ一度乗ってしまった以上三十分は止まらないらしいし、それまで我慢するしかない。

微妙な気まずさを感じながら向かい合って椅子に腰かける。

……それにしてもずいぶんとたくましいなあ。

余裕がなかったせいであんまり見てなかったけど、同乗した男性はかなり筋肉質な身体をしていた。小麦色の肌にくっきり割れた腹筋、太い両腕が男らしさを感じさせる。

その中でも私の視線は段々と彼の股間へ向いていった。

女子高に通っていて男性に会う機会の少ない私にとって、これまでに男の人の股間を見る機会なんてほとんどなかった。男性器自体は性教育の授業で見たことがあったけど、断面図だったり縮んでいる状態だったり生姿を見れたことは一度もない。

今日ランドを訪れてからも逃げてばかりで、こんなにじっくりと男性器を見るのは今が初めてだ。

こんなに大きなモノがあるなんて……

太い血管が脈打ち、先端から垂れる透明な汁と汗で濡れている。黒光りするのをグロテスクだと思いながらも目が離せない。一応コンドームは付けているみたいだけどかなり薄いようでリアルに見える。

さっきまで見てきた股間を突かれて気持ちよさそうに喘ぐ女性たちを思い浮かべ、いつの間にかこれが自分に入ってくるところを想像してしまう。

「大丈夫？　すごい顔してるよ」

「えっ？　あれ、あたしなんで……」

気づけば目の前の彼は私の方を見て微笑んでいた。

言われて自分が知らないうちによだれを垂らしていることを知り、慌てて拭う。視線をそらそうとして窓ガラスを見て、そこに映る自分の顔に絶句した。

そこにいたのはいやらしい笑みを浮かべる一匹のメスだった。

あのラバーズーツ女や、これまでランドで嫌というほど見てきた女性たちのように、ほかでもない私が頬を緩めて目を血走らせている。目には薄いハートマークが浮かび、口周りによだれで濡れている。丸見えの肌にはじんわりと汗が滲んでいた。

「いやっ、その、これは違って……」

顔を両手で押さえるけど、身体の内側から湧いてくるような熱さは止まらない。まるで自分が自分じゃなくなってしまったみたいだ。

突然、マッチョの彼は立ち上がり、私の隣へと強引に座ってきた。肌と肌が触れ合って汗が溶け合う。

濃厚な男性の香りにクラクラしそうだ。

彼はそのまま私に顔を近づけ、ゆっくりと距離をつめてくる。

やめて、と言おうとした口は彼の唇で塞がれてしまった。
「ふっ……♡ んむうつ、むぐつ、んあ……………」

力づくで押し込まれた舌は私の舌に絡み、彼のよだれを流し込む。あっという間に口の中が彼のものになってしまう。
目が眩むような感覚に、私はすっかり虜になっていた。

「ぶはっ……最後にもう一回だけ聞いておこうかな。本当にえっちしないでいいんだね？」

永遠のように思われた口づけが終わっても、私は口が閉じれないでいた。垂れていくよだれは糸を引きながら肌をなぞっていく。
私の手はいつの間にか彼の男性器に触れていた。

「お願い……します」

今までの葛藤も恥も追いやって、やっとの思いで本心を伝える。彼はそんな私を満面の笑みで受け入れてくれた。

ソファーに腰かける彼の前に立つと、ムキムキの両腕が私の身体を持ち上げてくれた。がっしりとした安定感を感じながら男性器の上に浮かされる。

股間のシールは剥がされていて、閉じたままの女性器が熱を帯びていた。

逃げ場のない距離で彼の息を感じる。ゆっくり下へ下へと降ろされ、ついに私の秘部に彼の男性器が重なった。

「あの……私、初めてで。こんな大きなお、おちんちんなんて入るのでしょうか……」

直前になって怖気づく私を安心させるように彼が笑う。

「大丈夫。女の子のおマンコはおちんぽを受け入れるためにあるんだから」

「そう、なんですか。そうですよね！」

そう言ってもらえるとなんだか大丈夫な気がしてきた。

おマンコ、おちんぽ。下品な言い方だっけとずっと避けてきたけど、もっと自分に素直になっていいのかも……そんな風に思えるのは彼のおかげかな。

入り口に触れた彼のおちんぼが少しずつおマンコを押し広げてくる。初めての感覚だ。

ぷつ……ぷつ……と太くて大きなモノが大切な部分を壊しているのがわかる。身体の内奥の内奥が悲鳴を上げていた。

でも不思議と痛みは感じない。痺れるような快感だけが頭を支配していた。

「あ……んお……………♡」

「おーすごい、全部入っちゃったよ。それじゃゆっくり動かすからね」

うごかす？ ただでせえ息もできないくら苦しいのに……？

そんなことを考えるのもつかの間、彼は私を掴んだまま上下に動かし始めた。おマンコの奥がごりゅごりゅ♡を音を立てて削れていく。気持ちよさで死んでしまいそうだった。

「ん……あむ……えおつ……ん♡」

気づけば自分から彼の唇を求め、空いた両手で抱き着いていた。混ざり合う体温が一つになっていることを教えてくれる。セックスがこんなに気持ちいいなんて知らなかった。

何度も腰を打ち付けたところで、男性はうめき声をあげる。

「キツ……限界だ！ 出すから受け止めてくれ！」

そう言った次の瞬間、彼のおちんぼが身体の内奥でぴくっと震えた。次の瞬間熱い液体が噴き出し、ゴム越しに私のおマンコを埋め尽くしていく。

これがザーメン……これがセックス……なんて素敵なんだろう。

抱きしめあったまま、私たちはじっと快感の余韻を味わった。

「お帰りなさい！ 終点に到着で一す！」

「あつ♡ んあつ……もっと見てえ……！ 気持ちいい……」

姦乱車を終えてもまだやり足りなかった私は、彼にお願いしてもう少しえっちさせてもらうことにした。ほどけた髪をさっきのゴムで結びなおし、彼に抱えられたままランドを歩く。

足をがっしりと持たれて開かれているので股間に風があたる。

おマンコにおちんぼが入り出すのを見られながら歩くのにゾクゾクしてしまう。

「見てあれ、すごいおっきい……」

「あの娘も気持ちよさそう～ 羨ましいなあ」

「私もあんなおちんぼハメられたい！ マンズリとまんなあ～い……！」

みんなからの羨望の視線がほんとうに最高。セックスの快感と合わさって何回アクメキメでも治まらない。

水龍敬ランドに来て良かったと心から思う。

「すいませ～ん、ハメハメTVのものなんですけど取材してもよろしいでしょうか？」

彼と歩いていると、カメラマンを連れたバニースーツの女性が目の前に現れた。

取材を快諾して喘ぎながらも質問に答える。自分が裸でよがる様子が全国にさらされていると思うと死にそうなくらい気持ちがいい。

「初めてでこの乱れっぷりなんですかあ、すごいですねえ！ 今の気持ちを伝えたい人はいますか？」

キャスターはマンズリしながらマイクを差し出してきた。少し身体を落ち着けて、カメラに向けてピースを作る。

「お父さん、お母さん。こんなえっちな娘でごめんなさい！ お姉ちゃん、今度一緒にえっちしようね♡」

水島智香(みずしまともか)

身体情報

身長:174.8cm 体重:68.4kg

26 歳

ステータス:水龍敬ランド非正規職員

スリーサイズ: 89/72/98

プロフィール

元国家組織からのスパイで、現在は水龍敬ランドのキャスト。

三年前ランドの実情調査のために送り込まれてきたのが発覚。MC 投与によって催眠状態に陥らせることに成功し、それ以降は模範的な仕事を發揮している。

現在の彼女はランドの理念に心酔しており、男性に犯されることこそ女性の一番の幸福だと信じ切っている。記憶の書き換えも完了済み。自分は昔から淫乱な性格で、幼い頃からの夢だった水龍敬ランドへの就職を果たしたと認識している。

寡黙で勤勉な姿勢は洗脳前から変化していない。

給料の大半をアダルトグッズや AV、エロ漫画などの性的娯楽につぎ込んでいるとのこと。プライベートでもろくに趣味や交友を持たず自慰にふけている。

これは MC による性欲増大の結果と思われるが治療の予定はない。

容姿

純黒でストレートな長髪を背中まで伸ばしている。基本的に無表情を維持しているため、一見すると冷たい美人という印象を与える。

催眠内容

催眠強度:強

催眠内容:常識改変(強)、性的忌避感喪失、性欲強化(大)、認識操作、記憶変換

Story

目を開くと、アルミ製の安っぽい天井が目に映る。起床の時間だ。

簡素な室内にはアダルトビデオのケース、大小さまざまなディルドや昨日使って濡れたままのバイブが転がっていた。小さめのテレビはちょうど絶頂を迎えた女優のシーンで停止している。

どうやらベッドでオナって寝落ちしてしまったらしい。

固めのマットレスから身体を起こし、近くに落ちていたブラとパンツをかごに投げ入れる。天井からぶら下がるハンガーの一つを取る。

ここは水龍敬ランドで最も数が多い非正規社員のキャストが寝泊まりするコンテナアパート。トイレと風呂は共同、壁は薄いので互いの喘ぎ声は丸聞こえ。

お世辞にも待遇のいい寝床だとは言えない。

それでも私はこの住まいが嫌いじゃない。なぜならここでの生活は私が水龍敬ランドの職員だってことの証明でもあるから。

昔からの夢が叶ったっていう証。その誇りを胸に、私は今日もゲストに犯されるための準備をする。

鏡に映る私はいつも通りの制服に身を包み、化粧を終えていた。こちらを向く顔を見つめ返す。

「今日も一日、頑張りましょう」

ランドの中は高校生頃の少女少女から子連れの母親、大学生と思しき青年まで様々な人で賑わっていました。みな多種多様の卑猥な服装に身を包んでいて、見ただけでムラムラしてきます。今では私もこの風景の一員です。

「ねえお姉さ〜ん。今空いてる？」

「はい、なんですか」

呼ばれた声に振り向くとそこには全身を小麦色に焼いた若い男性ゲストがいらっしゃいました。非常に細いブリーフスタイルの水着を履いていて、立派な勃起おちんぽをはみ出させています。

全体的にがっしりとした体つきでオス臭さプンプンします。全体的にチャライ雰囲気でお前を孕ませてやるとでも言いたげな圧を感じました。

「俺ここに来るの初めてでさあ。本当にそこらの女犯していいの？」

サングラスに明るい茶色の短髪と軽いノリの青年は笑いながら言いました。

なるほど、初めての訪問でしたか。道理で浮ついた空気を感じたハズです。

水龍敬ランドではテーマパークとしての性質上、このように女性を軽く見ている輩が訪れてくることも珍しくありません。その際はキャストがしているいいこととダメなことをしっかり教えて差し上げるようになっています。

「ええ、もちろん。当ランドはフリーセックスを掲げる性の楽園。そこらのメスはザーメンをこき捨てるだけのオナホとしてご使用ください。他のお客様のお連れはその限りではありませんが」

「へえ～ お姉さんも？」

「んうっ……んむ……えう……」

お客様は私の生乳をにぎにぎと手のひらで弄びながら、唇を重ねて舌を押し入れて来ました。タバコ臭さと苦味を感じますが顔に出してはいけません。

もう片方の手でデカ尻を鷲掴みにしていられしゃるようですがこれも業務の範囲内。身体全体を使って楽しんで頂かないと。

ねっとり濃厚なディープキスを楽しみつつ、空いている両手でキス中の方の勃起おちんぽをなでなでします。ゴム手袋越しに伝わる熱におマンコがキュンキュンしてしまいました。

「……ぷはあっ。もちろんです、ムラムラした時にはその場で無理やりレイプして下さって構いません」

右手で亀頭を優しく撫で、左手で竿をそっと上下させます。お客様はにやにやとした笑みを崩しませんが気持ちよさを感じているの是一目でわかりました。

彼は私の肩を掴みそのまま力を入れて地面へと押し倒しました。ランド入り口付近のこのフロアは軟質な素材で使われているため、寝転がっての性行為が可能です。入場直後で興奮状態にあるゲストには重宝されています。

抵抗せず、腕を広げて受け入れ姿勢を取りました。私を見下ろすお客様はちんぽを露出させおマンコに狙いを定めます。

「……あんたらって、そんなカッコで恥ずかしくないの？」

「何を恥じることがありましようか。おちんぽをイライラさせて即ハメを誘うには必要な衣装ですから」

今日私が着ている衣装はゴムスーツと呼ばれる制服の一つ。グリーンのビニール製のストッキングと手袋を基調に、特殊ゴムで作られたビキニ風チューブトップを着ています。

乳房とおマンコ部分はゴムが伸び縮みして開閉できるので、すぐにおちんぽをハメることができるようになっています。

私は両手でおマンコ部分のゴムを引っ張ります。ぴっちりと密着したスーツ股間部に丸い穴が開き、セックス準備が整いました。

お客様の勃起ちんぽはカウパーを垂らしながら、ゆっくりとおマンコの奥へ降りてきました。荒い息を吐く彼の顔がすぐそばまで迫っています。

「ほっお……こりやすげえ名器だ……腰が止まんねえ」

お客様は激しく腰を上下に振り、太く脈打つおちんぽで私のメス穴を掘り始めました。逞しい肉棒が私のおマンコ内を出入りする度に強烈な刺激が下半身を貫きます。

彼の背中に両手を回し、身を削るような快感に少しの間浸ってしまいました。

「お姉さん……ああ、ともかちゃん。あんまり表情変わんないんだねえ」

レイプされている最中だというのに嬌声もアへ顔も晒さない私を不思議がったのか、お客様は耳元でささやき始めました。声音は不機嫌というより疑問に思っているという感じでしょうか。

実のところ私もいっぱいいいいなのですが、あまり表情が変わらないせいで誤解されることが多いです。それでも黙っているわけにもいかないのが業務の辛いところ。

「あっ……んう……そんなことは……んくうっ……顔に出ないだけ……でえっ！」

努めて冷静に答えようとしても、口をついて出てくるのはとろけきったメスの声。平静さを保つにはまだまだ修行が足りません。

必死に答えようとする私の姿に満足したのか、男性ゲストは腰の動きを落ち着けました。そろそろ射精の瞬間が近いでしょう。

彼の精液を中で受け止めようと、背中を傷つけないよう注意しながら両足で彼の身体にしがみつきます。意図を察した彼は奥の奥までおちんぼを深く挿し入れました。

「うっ……おらあっ……く、はあっ！」

「……………」

殿方がメスを孕ませようと息も絶え絶えになっている姿は見ごたえがあります。そんな彼の様子を見上げながら、私は無言で中出しの余韻に浸りました。

「ふうっ……ご利用、ありがとうございました……………」

初訪問のチャラ男様を見送った私は、引き続き入り口付近のエリアで性奉仕業務にあたっていました。今日も快適なセックスを求める男性ゲストとおちんぼを求める淫乱メスオナホたちの客足はひっきりなしに続きます。

午前中のおマンコ利用者は十名ほど、お口とケツマンコはそれぞれ五名ほど。片足を上げたY字バランスでの生ハメを希望した方が去り、やっと一息つけました。

時計を見ればすでにお昼を過ぎた頃合い。入口の手は足りているようですし、シフト通りに休憩を取っても大丈夫でしょう。おマンコから零れるザーメンを手で拭いつつその場を後にしました。

たどり着いたのは中央広場。ちんこ噴水を囲むように作られたこの広場では、水浴びとセックスを楽しむ人々で溢れています。

思わず私も水浴びをしたくなりますが今は工作中。ぐっところえて目的の場所へと向かいます。

「安全性、異常なし……確認」

空いているベンチに不審な設置物などがいないのを確認した私はその隣に腰を屈めます。地面にひざまずき、大口を開けてその前に両手を広げたまま固定。

これで準備は完了、業務の一つであるコンドーム用ごみ箱です。

最近では以前ほどランド内でコンドームを使う方は少なくなっています。生ハメの方が気持ちいいですからね。

それでも出されたザーメンを持ち運びたい、身に着けたい、身体を汚したくないという要望からゴムを使うお客様は結構な数いらっしゃいます。

そんなお客様のために無償で配布されている水龍敬ランド印のコンドーム。当ランドの最新型コンドームはゴム特有の臭みを排除し、更には食べることもできるという優れもの。

そんなゴムがランド内にポイ捨てされるのを防ぐのがこのごみ箱業務、手の空いたキャストが不要になったゴムを食べて処理する仕事です。

歩き回ってゴムを拾っては食べるものもいれば、下半身を晒しておマンコに捨てるよう促す職員もいて処理の仕方は人それぞれ。私は一か所でじっと待機し、ロマンコをごみ箱扱いされるのがお気に入りです。

「ねえ早くランチ行こ〜」

「そうだね。あ、待って使ったゴム捨ててくから」

と、通りすがりのメスマンコ二人組が私のところで止まりました。彼女らのうち一人がひもビキニに引っ掛けられたゴムを取り外し、私の顔へと投げ捨てました。

べちゃっ、という音とともにカラフルなコンドームが直撃。くたくたのゴムはザーメンをこぼしながら口へと落ちていきます。

精液が入らないよう目を閉じたまま口内に専念します。ひと口ひと口咀嚼するたび、薄いゴムと濃厚な精液がぐちゃぐちゃと交わっていくのがたまりません。まるで口におちんぼをぶち込まれてずっと射精されているような感覚にメロメロでした。

「あれ、ともかちゃんじゃん。何してんの？ トイレ役？」

声をかけられて目を開けると、そこには本日最初にお相手をしたチャラ男様がいらっしゃいました。朝見た時より身体は汗で濡れていて、筋肉質な肌がテカっています。片手には食べかけのソフトクリームを持っていて楽しんでいる様子が伺えますね。

本当ならまだまだザーメンゴムを味わっていたいところですが、ゲストに話しかけたのなら話は別。口内のごみを一思いに呑み込み、喉を鳴らして口を開きます。

「これ、はっ……げえつぶ……業務の一環でして、使用済みのコンドームを食べて処理していました。私にとっては昼食も兼ねています」

イカ臭いげつぶをぶちまけた私を見下ろし、お客様は楽しそうに笑っていました。

「あっはっは！ マジメなツラでゴム喰ってんのおもしれー！ おっけ、待ってて」
「……？」

彼はソフトクリームを私の口へと押し込むと、足早にどこかへ去っていきました。唾液で溶けた甘味と冷たさがザーメンの余韻を受け流していきます。少々不満を感じるものの、頂いたものを吐き出せるわけもなく……

待っててという言葉の意図はわからず、ひざまずいたまま次の利用を待つことにしました。

それからしばらくゴム用ごみ箱としての仕事を続けました。

ちらほらと利用者はいるものの、もっと味わいたいという飢えのような感覚はなかなかぬぐい切れません。物足りなさがありますがそろそろ通常業務に移らなくては……と考え始めた時、聞きなれた声が耳に届きました。

「ともかちゃんお待たせ！ ほら！」

「お客様、それは……」

三度私の前に現れたチャラ男様の手には、使用済みのコンドームが大量に入った透明なビニール袋が握られていました。

私が呆気にとられていると、彼は満面の笑みを浮かべて近寄ってきます。よほど急いでいたのか息は荒い。彼の身にまとう汗とザーメン臭の混じった濃厚な空気だけで妊娠してしまいそうです。

「ちょっとやるのに飽きて暇だったからさ、そこら辺から集めてきたわ。素手で触りたくないから時間かかったけど。これ食べるとこ見せてよ」

「喜んで……！」

思ってもないご厚意に身も心も感動で打ち震えてしまいます。あまり特定のゲストから物品や施しを頂くのは褒められたことではありませんが、ただごみ箱を利用されるだけなら問題ありません……よね。

姿勢を正し再度受け入れ体勢をとります。チャラ男様はビニール袋をひっくり返し、べたつく中身を少しずつ落としてくれました。

色とりどりのゴムに加えて粘度、色も臭いも様々なザーメンが一つのしずくのように私の顔へと降ってきます。囙むのも間に合わず喉を通り抜け、口に入らない分は身体を濡らし……あっという間に私はゴムとザーメン塗れになってしまいました。

それでも、ああ、それでも。
私はこの上なく幸福でした……♡

「ふう……今日も疲れましたね………充実してはいましたけど」

一日の仕事を終え、コンテナの部屋へと戻ってきました。ランド内の設備で汚れは落としたものの疲れはそうはいきません。今すぐにでも寝てしまいたい気分です。

明日は午後からのシフトですし昼までゆっくり寝ることにしましょう。

セフレになったチャラ男さんの連絡先をスマホに登録した私は、さっさと寝間着に着替えてベッドに横になりました。

……と、そこで欠かせない日課を忘れていることに気づきもう一度電気を点けます。

「危ない危ない。これを吞むのを忘れるなんて」

取り出したのはランドから支給されている『MC・錠剤版』という薬。キャストの精神状態を安定させ、疲労回復や睡眠促進効果まであるとのこと。社員は毎日の服用が義務付けられています。

水と合わせて一粒吞むと途端に瞼が重くなってきました。この眠気はおそらく思い込みによるものですが慣れとは怖いものです。

もう一度ベッドを整え、まどろむ意識を手放しました。

明日もきっと、良い日になるでしょう。

あとがき

現在水龍敬ワールド当日 2019 年 11 月 3 日 1 時 24 分。このあとがきを書いています。
実は先ほど同じことを終えたところでデータが破損、印刷も終わっていないというのにも
う一度あとがきを書くというなんとも馬鹿げた状況に陥っております。

まずはこの作品をご購入いただきましたこととお礼申し上げます。

サークル参加も、コピー本づくりも初めてな私の作品は拙い点多かったことと思いま
す。それでも手に取り、購入し、読んでいただきましたこと、本当にありがとうございました。

水龍敬先生は私が憧れるエロ漫画家の一人として、催眠を愛好するきっかけでもあり
ます。先生の MC 学園は私にとってのバイブルです。

こうして拙いながらも先生のイベントに端の端として携われたことは私の誇りであります。
かなりの突貫工事になってしまいましたが、これからも憧れに近づけるよう精進していき
たいと思います。

それでは編集作業がありますのでこの辺で。

何かありましたら以下の連絡先によりしくお願いいたします。

ピクシブ: 9971234

ツイッター: @lost_waves_34

